

「あなたがたに平和がありますように」

(ヨハネによる福音書20:19-31)

今日はヨハネによる福音書において、初めて弟子たちが復活の主イエスに出会う場面でした。この直前の箇所では、マグダラのマリアが主イエスが葬られた墓が空っぽになっていることを発見し、ペトロや主の愛しておられた弟子へとそのことを報告します。彼らは、主イエスの遺体が墓の中になことを知ると、何故だか家に帰ってしまいます。しかし、マグダラのマリアは墓に残りました。そこに主イエスが現れ、彼女はご復活の主イエスと出会います。マリアはどんなに嬉しかったのでしょうか。彼女は急いで弟子たちがいる家へ行き、「わたしは主を見ました」と告げ、主イエスが弟子たちに伝えるようにと仰ったことを報告しました。そして、ここからが今日の話です。このマリアの報告を聞いた彼らはどうしたのでしょうか。なんと自分たちのいる家の鍵という鍵をすべてかけてこもってしまうのです。一体なぜでしょうか。聖書には「ユダヤ人たちが恐れて」とあります。では、その恐怖とはどのようなものだったのでしょうか。

少し前の主日に読んだ箇所、ラザロの死の場面もそうでしたが、ヨハネによる福音書の記述は生々しいものです。死者の匂い、十字架上のイエスの脇腹の描写など、その場面がありありと眼前に浮かび上がってくる、その現場の匂いが漂ってくるような、それがヨハネによる福音書です。そういう生々しい弟子たちの気持ちを想像したいと思います。弟子たちの恐怖はどこにあったのでしょうか。「ユダヤ人を恐れた」ということは、彼らは「主イエスが復活した」というマリアの報告を信じられず、主イエスの遺体をユダヤ人たちが運び出してしまったと考えたのかもしれない。ユダヤ人たちは主イエスの遺体までも取り去り、徹底的に主イエスの痕跡をなくそうとしている。となると、ユダヤ人たちが次に狙うのは自分たちに違いない。そのような恐怖が彼らを襲ったのかもしれない。また別の見方もできます。弟子たちはマグダラのマリアの報告を信じたのかもしれない。すると、これは想像が過ぎるかもしれませんが、主イエスが復活したことがこれからユダヤ人たちに知れ渡ることになる。これによって、ユダヤ人たちは主イエスが真に神の子であったことを知ることになる。となると、その弟子でありながら、主イエスを裏切った者たちのことを、何たる不信仰者だ！とユダヤ人たちが攻めに來るかもしれない。これもまた恐怖です。これは確かに想像が過ぎるかもしれない。しかし、恐怖に囚われた人間というのは、通常では考えられないような想像までして、その恐怖の深みへとハマっていくものです。そしてまた何よりも、彼らには最大の恐怖がありました。それは、主イエスを裏切ってしまった、ということです。あれだけ愛してくださった師匠を裏切ってしまった。そして、その師匠は裏切りの果に、苦しみのうちに殺されてしまった。死んでしまったら償いようがない。弟子たちは、この取り返しのつかないとてもつらい罪責感にがんじがらめになり、後悔や恐怖のなかで、呼吸すらできないほど苦しんでいたことでしょう。戸を閉ざしていた、というのは、子供が暗い部屋での恐怖を布団に潜り込んで何とかやり過ごそうとするように、部屋の鍵ばかりか自分たちの心をも閉ざして、何とかその恐怖から逃れよう、身を守ろうとしていた、ということを表しているように感じられます。

しかし、その彼らの真ん中に、主イエスは来てくださるのです。「あなたがたに平和があるように。」弟子たちのすべての恐怖が吹っ飛んだに違いありません。彼らは、「主を見て喜んだ」とあるように、心からの喜びで満たされたのです。復活とはなんとという恵みでしょうか。どうにもならない後悔、悔み、死までも超えて、そこから解放してくださる。どうにもならない恐怖の闇の中にまで、復活の主イエスが来てくださるのです。その主イエスが言われた、「あなたがた

に平和があるように。」という言葉は、単なる挨拶を超えた、恐れを喜びに変える言葉です。そして続けて言われた、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」という言葉は、弟子たちをご自分の働きへと招く言葉です。主に赦されたものは、主によって遣わされるものへと変えられるのです。主イエスは弟子たちに息を吹きかけます。これは、創世記で神が人を創造された時、命を吹き込んだあの息吹です。すべての人をその汚れから清める霊による息吹です。弟子たちの恐怖はこの息吹によって吹き飛ばされました。この神の息吹によって、彼らは今や赦され、新たに創造され、神の赦しをこの世に宣言するために遣わされる新たな命を与えられたのです。

さて、なぜかこの場面に立ち会うことができなかつたトマスは、他の弟子たちが「わたしたちは主イエスを見た」と証しするのを信じるのができませんでした。彼は、復活が事実だということの確証を求めました。何とも人間臭い男です。しかしなぜ、トマスはこれほど頑なになってしまったのでしょうか。それは、「主を見て喜んだ」弟子たちに対して、トマスが主を見ることができず、その喜びに与れなかつたからではないでしょうか。トマスは他の弟子たちが復活の主イエスに会ったことが羨ましくてたまらなかつたことでしょうか。だからこそトマスは、悔しがる子どものように頑なになり、「傷を見るまでは信じない」と言ってしまったのではないのでしょうか。その言葉は不信仰と咎められるものかもしれません。しかしトマスのように素直に、嫉妬して、ふてくされるほどに主イエスを求め続ける、それもまた信仰者の尊い姿に思えます。何よりも、わたしたちはトマスがいてくれたおかげで、主イエスの優しさを知るのであります。傷を見るまで信じないと言ったトマスにも主イエスは表れ、ご自分の傷に触れるようにと声をかけてくださる。ここに主イエスの深い愛を感じずにはられません。その愛を受けたからこそ、「信じないものではなく、信じるものになりなさい」と言われたトマスは、傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と言って、主イエスを「神」と信仰告白したのです。これは、それまでの弟子たちもしなかつた信仰告白です。トマスは疑いました。しかし、疑いの先に主イエスに出会い、その愛に触れ、主イエスへの深い信仰へと導かれたのです。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」この言葉は、トマスにだけ向けられた言葉では留まりません。この言葉は、主イエスを直接目にするのができない今を生きるわたしたち、この言葉を聴くすべての者に向かって語られています。「見えなくとも、わたしはあなた方と必ず共にいる。そのことを信じなさい」と主イエスは仰っているのです。主イエスがはじめに弟子たちに表れたのも、そしてトマスに表れたのも「週の初めの日」、つまり日曜日でした。わたしたちも毎週日曜日、主の復活を祝って礼拝をささげています。今は物理的に集まることはできませんが、閉じられた戸も超えて弟子たちのなかに立たれたように、物理的な制約を超えて、わたしたちのなかにも来てくださいます。このことをわたしたちが信じるならば、この礼拝のなかで、この交わりのなかで、わたしたちは復活の主イエスに出会うことができる、ということです。これはなんと嬉しいことでしょうか。主イエスは「あなたがたに平和があるように」と、わたしたち一人ひとりを祝福し、わたしたち一人ひとりにも神の息吹を注いでくださるのであります。暗闇のなかで苦しみ、閉じこもっている命に向かって、罪の赦しを宣言してくださるのであります。今、あらためてその主イエスの深い愛に触れ、弟子たちのように新しい命に与りたいと願います。そのために、弟子たちが変えられたように、この復活節、わたしたちが「見ないのに信じる」幸いな者とされまますように。そして、今を生きながらも、主を見る喜びに与り、主の愛を受け、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」という招きに従って歩むことができますように。